

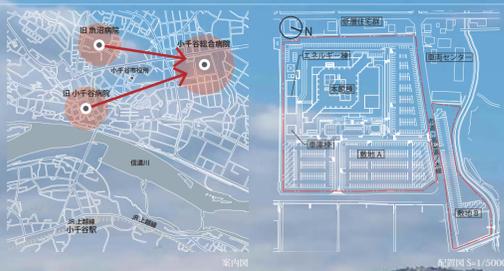
JA 新潟厚生連 小千谷総合病院

1. 新病院設立と現存病院統合の背景

全国的な医師不足の状況の中、小千谷市内の医療提供を支えている新潟県厚生農業協同組合連合会 魚沼病院、公益財団法人 小千谷総合病院においても医師確保は困難を極め、診療科の廃止等診療体制の縮小を余儀なくされていた。さらに、少子高齢化や過疎化等が着実に進展している中、魚沼病院は築34年、小千谷総合病院は築43年が経過する中で新潟県中越地震の被災もあることから、ともに施設の老朽化・狭隘化が著しく、施設の建替などの必要性にも迫られていた。

こうした状況から、平成21年3月に小千谷市が仲介役となり、両病院関係者・有識者などから構成する統合協議会が設置され、平成24年8月には「財団法人小千谷総合病院・厚生連魚沼病院統合再編整備基本構想」として協議結果の最終報告が行われる。その後、報告内容に基づき両病院の形成候補地の選定・基本構想等について検討を行ってきた。

本計画は、JA 新潟厚生連魚沼病院と公益財団法人小千谷総合病院の2病院を統合し、小千谷市周辺を診療圏とした300床（一般250床、療養病床50床）の病院再編事業である。

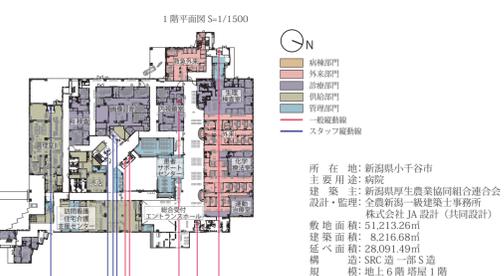


2. 地域と関わりをもつ配置計画

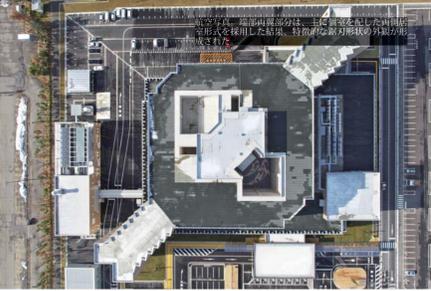
本敷地は、JR小千谷駅から北西に直線距離で2kmほどに位置し、西側に低層住宅群、東側に水田が広がる平地である。市道高架道/木線に分離された敷地2敷地は、本館及び利用者駐車場を配置した敷地Aと職員駐車場を配置した敷地Bとして、それぞれ機能を分散させる土地利用計画とした。

緊急用ヘリコプター発着場は、敷地北側の小千谷市車庫センターを活用した。また、食堂は南側にある商業施設を利用するものとし、敷地周辺の施設の積極的利用を促した。なお、交通会社との協議の末、新規バス路線の開通による利便性の向上がなされた。

敷地の取得は、土地収用法に係る事業認定を取得したことで、平和的かつ経済的な大規模事業用地の獲得ができたといえる。



北東から見る建物全景。新潟県厚生農業協同組合連合会魚沼病院と公益財団法人小千谷総合病院。二つの病院の統合によって誕生した地域の中核病院である。

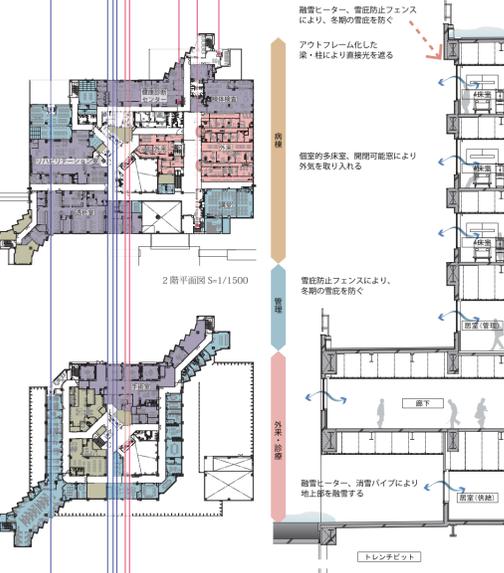


3. 平面構成

建物は、高層部の病棟と低層部の外来・診療部門を縦線での連携が可能であり、系列他院でも実績の多い基壇型を採用した。

1階に内科や外科、整形外科など比較的患者の多い外来や、救急、放射線、内視鏡、生理検査等を配置した。2階に部位別外来と検体検査、透視部門やリハビリテーション等の機能を配置し、3階には手術部門、中央材料、SPD、管理部門を設けた。

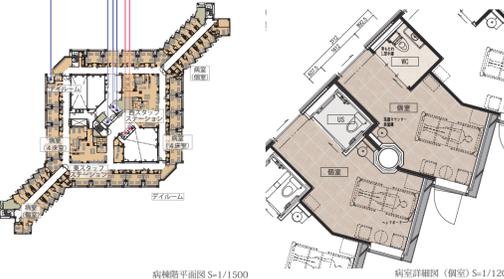
4階から6階は、東西にスタッフステーションを有する2看護単位の病棟形式を採用した。延べ面積の1床あたりは93㎡ほどであり、ゆとりのある公的総合病院である。



4. 動線の短縮と療養環境の向上

4階から6階の病棟階は、スタッフステーションからの動線短縮を主眼としたY字型病棟を2つ合わせた平面形状を採用した。端部両翼部分は、主に個室を配した両側居室形式とし、各室の採光やベッド搬送動線を考慮した結果、特異的な扇形形状の外観が形成された。

外壁に沿って配置した4床室は、アウトプリームとした梁・柱型から後退した外壁形状により、各ベッドに採光を確保した個室的多床室とした。



5. 色彩から療養環境を考える

院内のカラーテーマは、地域の重要無形文化財である小千谷縮（おちやちぢみ）から選定される日本の伝統色を設定し、サイン計画、内装計画を一貫して柔らかな色彩を選定することで、柔らかく暖かな印象を与えられるよう努めた。

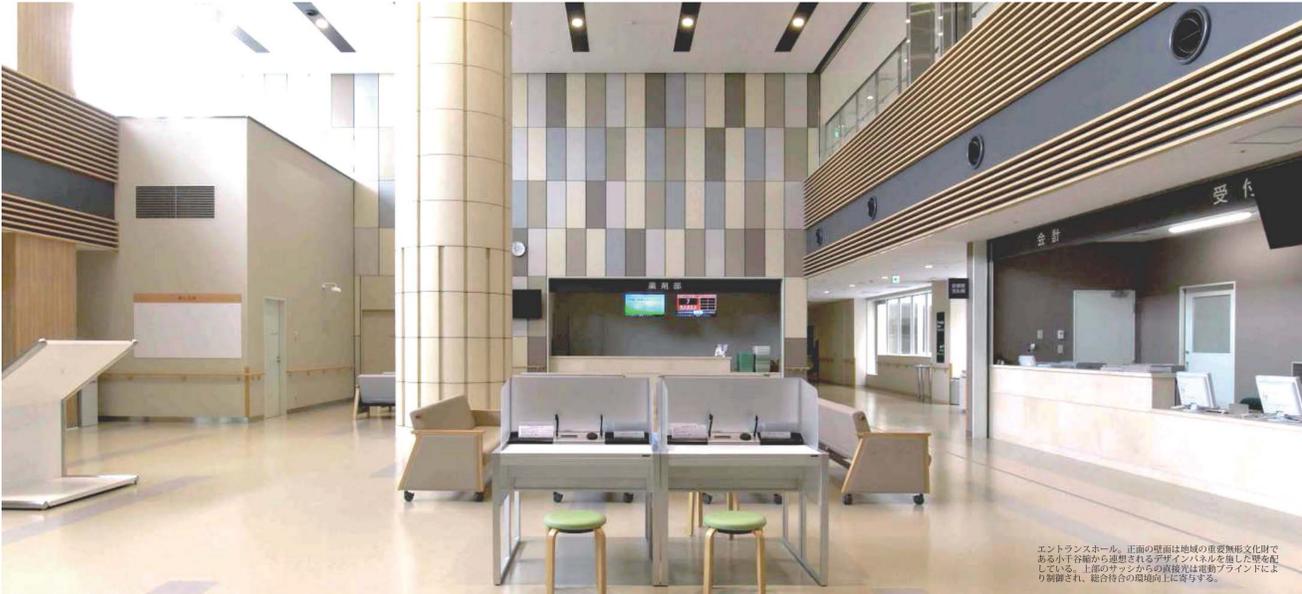
病棟階は、暖色のテーマを設定するとともに、接触頻度の多い医療ガス、ナースコール等をまとめたヘッドボード廻りには、アクセントクロスを採用により、部分的な貼替えを可能とし、意匠性と長期視点でのメンテナンス性を確保した。



6. 気候風土に呼応する建物

小千谷地域は、垂直積雪量が300cmに達する日本有数の豪雪地帯である。冬季の問題である雪害に対して、電気式ヒーターと雪害防止フェンスの組合わせで防制を行い、工事期間中に冬季の卓越傾向を抽出し、設置位置及び高さを見直しを再編した。

エントランスに位置する総合受付は、床暖房による居住域の温暖環境向上と風除室の2室化による寒気流入防止に努めた。



7. 建設費と維持管理費の縮減策

敷地内出入口周辺は、主に凍結防止を目的とした融雪ヒーターを敷き、構内通路・駐車場は、井水散布による消雪設備を広範囲に設置し、除雪の労力緩和と維持管理費の抑制に配慮した。

内装天井下材は、SQパー（亜鉛メッキ角型閉鎖型スタッド）により、耐久性と軽量化を図るとともに、熟練工による溶接が不要なSQ工法を一部採用した。

エントランスホールの壁面内装仕上げは、当初想定されていた天然石に代わって、一般材料である石膏ボードと不燃断熱を用いたデザインパネルを採用した。工事期間中にモックアップを制作して色・柄を熟考し、長大な壁面を魅力的な総合受付として計画するよう配慮した。

エントランスホール。正面の壁面は地域の重要無形文化財である小千谷縮から選定される「縮」の伝統色を用いた壁紙を採用している。上部の天井からの直接採光は電動ブラインドにより制御され、総合受付の環境向上に寄与する。